

特別寄稿

ジャックルジロー

『左翼のヴァール県。第一次世界大戦の終りから一九三〇年代中葉までの

ヴァール県人たちと社会主義（一九二〇—一九三五年）』について

平 田 好 成

一

Jルジローの論文（『ヴァール県人たちと社会主義、一九二〇—一九三五年』）は、一九九〇年二月二十四日、公開口頭審査を受けた、パリ第一大学（バンテオンルボンヌ）、文一人文学科における指導者、モーリスアギュロン Maurice Agulhon、コレージュドゥワルフランス教授という、国家博士論文の公開審査（政治的研究部分）の報告である。この論文は、二、八七〇頁あり、その内容は、極めて膨大なものである。

Jルジローは、パリ第一大学文一人文学科における歴史学講師から、現在北パリ大学文一人文一社会養成ル研究単位における現代史、人文科学系（政治学、経済学、社会学、文化学、地理学及び民族学系等）教授である。ラッセエイヌ La Seyne（ヴァール県）の出身の、Jルジローは、一九七〇年初めから、パリ第一大学の社会運動ルサンディカリスト（急進的労働組合活動家）史研究の責任者たちの一人であった。彼は、マルクス研究所歴史雑誌の編集会議の一員である（モーリスルトレーズ研究所から一九七九年に変更、一九九六年から歴史雑誌、マルクス圏に変更）。フランスの社会及び

政治史の専門家、J・J・ジローは、「両大戦間のフランス共産党の定着について」(社会出版、一九七七年¹⁾)及び「プロワール・フランシオン、共産党員及びサンディカリスト」(政治学全国財団出版、一九八九年²⁾)等の、数多い著作を出版した。「フランス労働運動の伝記辞典」(労働出版)の協力者でもあり、彼は、そこで特にヴァール県の活動家たちについて、約五、〇〇〇人の略述を行った。J・J・ジローは、筆者と定期的に文通しており、筆者の質問(一八か所)には、即座に答えている。

二

J・J・ジローの国家博士論文の骨子は、大著「左翼のヴァール県。第一次世界大戦の終りから一九三〇年代中葉までのヴァール県人たちと社会主義」(以下「左翼のヴァール県」と略記)ソルボンヌ出版、一九九五年二月で、³⁾圧縮して上梓された。大著は、八六一頁であり、本文は、七二七頁である。伝統的に、名著は地方(史)的に凝集されている。本書の内容は、目次に於いて、以下のように見える。

【序言】

第一章 ヴァール県、ヴァール県人たちと彼らの活動、枠、人口、農業と工業の活動、生活のレヴェルの取り組み方、大きな職業的社会的集団の進展、ヴァール県の庶民、農民たち、労働者たち及び外国人たち

第一部 介入と政治家のデモ

第二章 動揺させられたヴァール県の選択 戦争の状態から外出すること、労働者の再開、革命的春か、ヴァール県の社会主義、幾つかの新しい問題、選挙の調査、クレマンソーと上院議員選挙

第三章 労働者闘争から労働組合の分裂まで、少数派の労働組合の責任者たち、一般的なスト、鉄道労働者たち、多様化

された要求の基礎について膨張中の労働総同盟、一九二〇年五月、真にゼネストの方へか、海軍工廠、威嚇か、労働組合の方へ

第四章 分裂の方へ社会主義 先任者及び専従職員、新事実、ロシア、分裂の活力、革命的道あるいは改良主義的道か

第五章 社会党员たちの選挙の確認 社会党员たちによる政治的支配の再征服、確認、一時的な頂点

第六章 人民戦線への前奏曲 再び動揺させられた不安なヴァール県、一九三六年の大きな政治的派閥、一九三〇年代の

国民議会議員選挙及び社会職業的構造、左翼のヴァール県、選挙民の進展、活動の産業部門及び政治的選択

第一部の結論

第二部 社会主義の基礎

第七章 フランス社会党連盟 トウル大会後の復活、戦闘的な全体の進展、諸支部の生活、フランス社会党の中でヴァー

ル県人たち、ヴァール県社会党の闘士的な態度、ルノーデルによって起こされた路線、社会党連盟の中での少数派、

統一の急変

第八章 左翼の社交性について サークル、別の動き（人権同盟、フリーメイソン、自由思想派等）

第九章 小郡の選挙当選者たち 県会議員たち 左翼の多数派の中での社会党员たち、指導する機構、決定的行為、予算

の周到な作成、討議された大きな問題、政治的選択、郡会議

第十章 地方的決定機関 市町村会議選挙、市の役人たちの社会職業的性格

第二部の結論

第三部 都市の社会党员たち及びヴァール県の農村の社会党员たち

第十一章 支配的な社会主義から減らされた社会主義まで、トゥーロン、社会及び政治、勝利を得た社会主義、右翼の復帰、困難中の右翼の市当局、新しい社会党の敗北、再び活性化された社会主義

第十二章 別の都市の持続的な社会党の征服 労働者の都市の中で社会党の市当局、ラーセエイヌ、ドラギイニャン
あるいは県庁の中での社会党员たち

第十三章 ヴァール県の農村の社会党员たち、カルシエースの例 人間たち及び彼らの活動、ぶどう栽培の危機、カルシエース及び政治、カルシエースでの社会党员たち及び共産党员たち、市会での社会党员たち及び共産党员たち、市の危機及び政治的な危機、結末、左翼の敗北

第三部の結論

総論

付録は、表(一一八四)、人名の索引、ヴァール県の小郡の索引、ヴァール県の地方自治体の索引、グラフは代表制の目録及び表の目録である(七二九―八五一頁)。

J||ジローは、万遍なく、徹底的に、社会学的に調査||研究をする。研究は、微に入り、細に入るところがあり、注は、極めて豊富である。稀に、専門用語を仏和大辞典で参照したが、僅かに、誤植を、散見する。

現在、一九二〇―一九三〇年代の原資料は、五〇年を経て、完全に公開されている。原資料は、国立古文書(F7||一般警察、F1C||県行政データ等)、フランス国民議会(下院)古文書(C||総選挙調書等)、ヴァール県古文書(M||一般行政、Z||郡庁古文書、R||軍事的事件等)、ヴァール県年報、第三海上地区(A1、A2、A4||トゥーロン)、地方

自治体古文書（四分の三）及び民間古文書（証言、調査、新聞⇨情報の巨大組織）等である。⁽⁴⁾ また、原資料は、研究上、マルクス研究所⇨マルクスシレーニン主義研究所古文書（マイクロフィルム二七八号）、JIIシャルロー古文書（社会主義⇨労働組合主義史研究所）、JIIジロムスキー古文書（同上）、PIIフレイス古文書及びRIIルヌー古文書等である。⁽⁵⁾

九六県の中、第八三県のヴァール県（トゥーロン市）は、地中海沿岸で東から二番目である。ヴァール県は、第六県のアルプーマリティーム県（ニース市）と、第一三県のブッシュューデューローヌ県（マルセイユ市）の間に、挟まれている。一九三六年、四〇万弱の人口であった（七三〇頁）。

三

二〇年以上、JIIジローは、社会史での関係の中で、フランス労働運動史を理解するように探し求める。近づかれた領域の間に、彼は、ヴァール県を優遇した、そして、運動の構成要素の間に、彼は、社会主義を選んだ。博士論文「ヴァール県人たちと社会主義（一九二〇—一九三五年）」は、この考察の本質的な段階を構成する。

先ず、JIIジローの一般の問題提起を検討しよう。すなわち社会の進展のマルクス主義的な経済的機構と生産諸関係の分析は、彼の大きな理論的な方法を構成する。⁽⁶⁾（構造主義とマルクス主義、構造主義と歴史）一九六〇年代において、彼は、彼の指導者たち、EIIラブルース（初代フランス社会学研究所長）、PIIヴィラール（高等研究学校教員）、及びMIIアギユロンの歴史的影響を受けたが、全体史、総体史を入念に作り上げるべく、必ずしも指導者たちに従わなかった。彼らの本質的な質問を取り戻しながら、彼は、マルクス主義的なひらめきに比べて、彼らの隔たりを確認し、別の規律の研究者たちによって開かれた道を探究した。彼の歴史家としての務めの中で、対話は、彼に、政治及び社会史の問題に答えることを可能にした。

Ｊ・ジローは、二つの例を検討した。第一の例、すなわち一九六〇年代の終りから、彼は、通時的な進展及び同時的な断面図を対決させながら、構造的な分析及び歴史的は分析の間に、一致を探し求めた。彼は、政策によつて横切られた連帯の構造の継続を理解すること、その構造の動き、その構造の組織及び知覚し得る変動を解読することを望んだ。彼は、ヴァール県の中で、県会の各更新に対して社会党の伸張の段階を目立たせた。短い時間の中で、ずれ、相違、恒常性を巧みに獲得するため、彼は、突然起こされた歴史の危険を拒否しながら、専攻論文を優遇した。彼は、社会学、地理学もしくは民族学のような別の人文科学の方法と結果への最後の手段を押し付けて、定着の問題提起を述べた。

第二の例、すなわち政治的分野の自主性について、社会学者たちの研究は、Ｊ・ジローに、どのように権力及び権威の問題が、紛争の原資料になり得たかということを理解することを助けた。彼は、一九二四年の国民議會議員選挙への立候補者たちの間における、社会党から離れて置かれることあるいはカルシエースの社会党（六三九―七〇六頁）の指導する中核の変動が、問題であるとし、あらゆるレヴェルで、政治的職員の変化を検討した。これらの分析は、運動のイデオロギー的な動向と、指導者たち、敵たち、諸グループ、下部組織によるその動向との関係について、反省を伴う。彼は、政治の接見を理解することを望んだ。この選択は、彼の定着の問題提起に関連する。

Ｊ・ジローは、経済的条件及び社会的決定機関を細かく分析する前に、政治的諸事実を確認した。彼の博士論文の配列は、必ずしも研究の年次に反映しない。この仕事の活用に沿った政治の検証は、後にも、前にも、一緒には位置付けられなかった。

問題提起の第二の面、すなわち全国的及び地方的場について、Ｊ・ジローの研究は、県の研究の支持者たちと全国的局面の支持者たちの間に、討論が、展開した、一九六〇年代の終りから始まった。同時に、一般的現象、フランスでの共産主義の定着について、及び地方的場、一九三〇年代のヴァール県について選択して、彼は、よく二つの取り組み方を両立させるように理解した。県の領域について、数年後れて、彼は、危険を冒した。当時の大きな地域的な博士論文の調査モ

デルで、幾つかの自由を選びながら、彼の恒常的な不安は、先験的にこの最後の歴史の方向転換を再び見出すことを望まないで、歴史の地方主義的偏向から解放された、全国史の中で挿入された、地方史に対して、特別の地位を確立することであった。例えば、サンーサザンヤリー⁽⁸⁾の社会党のキャンペの紆余曲折は、全国的更には地域的変動に殆ど何も義務を負わない。地方史は、もつと一般的な働き掛けに対する必要な補足のようには思われない。地方史は、政治及び社会史の、イデオロギーへの支持あるいは拒否の決定的な面の知識を決定づける。もし、彼の定着の問題提起の枠内で、この表現を可能にするならば、下部組織によるこの歴史的建設は、彼の歴史家としての態度を規定する。彼は、活動の場について、政治的思想で、出会いと同時に民衆の表現の中で、あらゆる形態の下に、修士号を利用するよう、諸手段を探し求めた。

J||ジローは、全ての地方主義的誘惑に反対して、堅固な制約と多数の理論的刺激が、彼と一緒に、J||ドロズ（元ソルボンヌ大学名誉教授）によって、次いでA||プロスト（政治||歴史評論家）によって、指導されたセンターの枠内で、彼らの歴史修士号論文に対して、別のフランスの領域について、研究を履行した、百人の学生たちによって、提供されたことを、主張するはずである。

問題提起の第三面、すなわちJ||ジローは、地方社会の政治史を構成することを望んだ。政治的分野の相対的な自主性は、社会経済的分割の関係の中での、諸関係及び諸闘争の研究を押し付ける。社会集団^{カテゴリー}を定義するため及び政治的動きの集団の規則を発見するため、彼は、有権者たち、すなわち政治的に活動的なグループ、結社を区別した。両大戦間の、政治的生活に関する彼の分析は、生活の環境の中で、分析を取り替えるような企てだけに留まらない。彼は、分析が、社会史と関係して、進展の機構を陣地から追出すよう作用する環境で、その相互の関係の中で、分析を理解することを望んだ。彼は、ルノードル（ヴァール県の社会党右翼及び新社会党への傾向⁽⁹⁾）及び彼の支持者たちの概念及び実践を導いて、政治的及び社会的相互関係を引き出した。

民衆的現象を報告する、社会—政治史に貢献するため、J||ジローは、上部構造についての研究（イデオロギーと政治

家）及び構造についての研究（社会グループ、運動）を正面から先導した。われわれは、出発点に帰着する労働運動は、自らを歴史の組織の単なる見解からだけでなく、障壁を取り払われた、考慮された、環境の中で挿入されたように思う。定着の一般的な問題提起で、個人の役割は、自分を社会グループでの彼の関係の中に含まれた、彼の手柄の知識によって、再評価されたように思う。労働運動史は、彼の働き掛けの中で、本質的な場所を占める（JIIメートロン、伝記の研究）。

JIIジローにより三つの軸によって分配された、大きな結果を検討しよう。

第一の軸、すなわち、数年の間に、ヴァール県の多様性の中で互いに溶け合いながら、安定な全体の中で、及び変動する部門の中で登録しながら、社会主義及び社会黨員たちは、県内に、支配的な地位を獲得した。

安定な全体の中で、われわれは、大勢の勤労者たち、農民たち、国家のサラリーマンたち、政治的及び社会的民主主義の理想への古い賛同によってマークされたグループ、恒常的な更新で市町村の経験によってうろつかれた管理者たち、交代を保証する活動家たち、選挙によって獲得された地盤及び地方的下部組織を意味した。

変動する部門の中で、われわれは、フランス国籍の外国人たちの統合、共産党のモデルを引き合いに出しての組織の形態の競争、都市の発展及びそこから展開する混合、社会黨員たちをこの国家及び国家の政府に比べて、定義する義務、トゥーロン地域で、国家で、政治を立て直す構造、社会黨員たちの支配権の地位、すなわち、一九三〇年代の初めまで、増大する選挙の影響力、市町村における勢力伸張、県会への多数派の拡大、

すなわち、心性の中で、社交性の形態の中で、政治的同盟の中での定着、

すなわち、ヴァール県人たちの必需品での同一化、水、農村の開発、観光の発展、余暇、

すなわち、県の生き生きとした勢力の中での影響力、小所有者たち、勤労者たち、官吏たち、外国人たち、教員たち。

国家の支配、地域の中で遍在する軍事的権力の制御、婦人たちに影響を及ぼす可能性、あるいはトゥーロン海軍工廠の労働者たちの多数の部分は、社会黨員たちを免れる。

第二の軸、すなわち、社会主義の支配は、彼らの働き掛けの一貫性を保証するフランス社会党の中で、彼らの共通のひらめきを見出して、政治的管理者たちによって、世論の征服を意味する。一九二〇年の分裂の諸条件は、第三インターナショナルの中で留まるため理解し合う、二つのグループを多数派のままにして置く。いずれにせよ、二つの恒常的な感受性の事実である。

もつと多数の、ルノーデルの側近の大部分、社会主義闘争派のグループの活動家たち、ロンゲの、次いでブルムの支持者たち、少数派。

社会主義は、その代りに、社会主義を灌漑する、漸進的に、多様な決定機関を支配する、市町村当局、小郡会議、協同的構造すなわち、サークル、生産及び消費協同組合、労働組合、イデオロギー類似のグループ。

均質性を保証し得た、党派的新聞の欠如は、地理的に、イデオロギー的に、社会的に、多様化されたグループの熱望の中で、社会党の結果を探し求めることを強制する。党の統一が、譲歩するように、全体の地帯は、分裂の時（一九二〇年及びとりわけ一九三三年に）あるいは多様な型の反体制派の時（ブリニヨールの地域の中で旧代議士オーヴィニユ、サン||ザシャリーで市長A||マイユ⁽¹²⁾、サレルヌ⁽¹³⁾の戦闘的な全体及びサン|トロペーズ⁽¹⁴⁾の社会党の地方主義）、影響力を免れる。第三の軸、すなわち、ヴァール県人たちと社会主義の間に、出合いは、民衆、農民たち、小所有者||経営者たち、労働者たち、国家のサラリマンたちあるいは従属者たちの中で、生じる。この最後のトゥーロンの全体の中で、彼の労働組合の表現の中で、とりわけ海軍工廠で、共産主義、及びM||エスカルトフィグ⁽¹⁵⁾によって与えられた、特別の政治的形態は、慎重なライヴァルを構成する。

この出合いは、異なった雰囲気の中で、展開する。すなわち、平和の状態への復帰、一九一九年及び一九二〇年の社会の騒乱、ぶどう栽培の困難、県会の決議あるいは多様な市町村の管理の結果、一九二〇年代の初めに、急進社会党の左派による、ついで人民戦線の初期に、共産党員たちによる政治的同盟。

この出会いは、思想の代表団を受け入れて、異質の世界と管理に関する活動家たちの間の一致の時期によって表現される。後援のやり方を使用する、最初にルノーデル、話されあるいは表現され得る、人は、それによって恩恵に浴する。

この出会いは、左翼のヴァール県を延期して、相続者たちによって代表された、民主主義的及び社会的共和制への更新された加入を伴う。この最後のヴァール県の中で、フランス社会党は、増大する役割を演じる。その理由は、一九二〇—一九三〇年代の中で、政治は、構成された勢力によって届く範囲、民衆諸階層を浸透する。フランス社会党は、左翼の別の政治的運動を活動できなくすることを利用する。ヴァール県の急進社会党員たちは、恒久的に、地方とは異なった、影響力を行使するのにもはや成功しない。共産党員たちは、一九二〇年に、第三インターナショナルへの加入の運動の相対的な弱点の後に、デフレ政策の措置によって関係された、国家の依存する部門を除けば、ヴァール県の中で、強く感じられなかったが、経済的及び社会的危機の背景の中で、社会党の分裂後、現実的に影響力が強くなる。一九三六年の国民議会議員選挙は、グラフによる待遇によって、強調された新しい諸勢力関係を承認する。

J・J・ジローは、論稿を仕上げるため、企てられた研究報告の役割に言及することを望んだ。両大戦間の祝宴の暦の中で、一九二〇年二月二四日は、民主主義及び社会主義を引き合いに出す、ヴァール県の左翼の中で、最初の場所を占める。祝宴、舞踏会、集会は、第二共和制の記念日の時、左翼のヴァール県の結集力を強化するように理解する。当時、社会主義は、共通の思想で相互浸透して見出される。

第一次世界大戦まで、急進主義の名高い場所、ボーセで、二月二四日のサークルは、一九二〇年二月二四日のため、祝宴、内輪のダンスパーティー及び夕方のコンサートを企てない。その理由は、その議長によって前進させられた理由に従って、サークルを再生させることは必要であるのか。再活発化のため、この象徴的な日付の利用……。

フランス社会党員たちは、一九三三年の分裂後、結集する為に続ける、このサークルの中で、支配的立場を占める。共産党員は、一九三五年五月に、市長になる。一九三五年一月に、幾つかの共産党員を承認しながら、二月二四日のサー

クルの指導者たちは、われわれは、過去を抜きにして考える、分割する全てのものを考案しないであろう、及びわれわれを結び付けるものを探し求めるであろうと声明する。そして、一九三六年二月三日の日曜日、二〇一人の招待客たちは、政治的農民の防衛のデモ……を数で大きくするために、アピールに答える。

古文書へのこの最後の手段は、J・リジローの主要な指導者たちの一人を説明することを可能にした。すなわち、社会と政治的熱望の間に、出会いの構成する構成要素を分散させられた構造を理解するため、何の回り道も無視しないこと。⁽¹⁷⁾

四

その対象は、社会での関係、単なる歯車のように考察された民衆諸階層で、多様な性質の総選挙によって句読点を打たれた、長続きする組織によって構造化された、フランスの政治的生活の研究であった。知識と権力の保持者たち、すなわち、諸勢力と人間たちは、彼らの影響を及ぼし、普通選挙の中で正統化を探し求める。

このヴァール県、定められた地理的枠内で、この庶民を識別するため、幾つかの意味について、同時に、働く必要がある。すなわち、生産の中で、彼らの立場及び彼らの諸階級の状況がどうであろうと、大衆、すなわち、あらゆる住民。すなわち、生産諸関係の中で、彼らのメンバーが、同じ全体へ所属することである、意識によって定義された、社会諸階級の分析を構成する構成要素を近づけないよう可能にする、含み込む言葉、民衆諸階層、すなわち、そこから離れ得る、政策を支持する、民主主義的理想の使者、庶民。

政治における彼らの関係の中で、ヴァール県人たちを取り扱うことは、両大戦間に、左翼で、彼らの多数派の選択の中で、彼らを再び見出すことに帰着する。二〇世紀の初め以来、社会主義及び一般的な民主主義的熱望で混ざった、温和な左翼は、支配する。一九三六年は、過激派の情熱で更新されたデモのように思われる。五人の代議士について、二人は、

共産党に所属する、別の二人の代議士は、フランス社会党員たちである。別の選挙当選者は、トゥーロンの中道派の民衆的選挙民によって選ばれたエスカルトフィグで右翼に位置づけられる。

ヴァール県人たちは、労働者たちと同様に、一八四八年、一八五一年あるいは一九〇七年を作り出した、農民たちを含む、国家に従属する、トゥーロン及びラッセイエヌの勤労者たちばかりではない。彼らの左翼での投票は、一八四八年以来、先進的な共和的民主主義を引き合いに出す、諸闘争の長い伝統を延長する。南仏の社会の中で、政治的用語は、非常に広い意味、すなわち、都市の行政、政府の動向、日刊紙の管理を持っていた。これらの多様な介入は、外部に開かれた外国人のため迎えられた、これらの住民の中で、最後に均質の行動を創り出す。

ヴァール県は、人口に関する遅い進行をよく知っている。三〇万の構成単位の周りに留まって、県の人口は、別のフランスの諸地域から規則的に来る、外国人たち及び移民たちで豊かになる。この進展は、活動的な都市及び南仏の地帯に役立つ。

政治における民衆諸階層と諸関係

政治に敏感な農村の世界

村落の中で、社会と経済的条件の相違は、政治的分裂を引き起こさない。農業労働者、日雇い労働者、羊飼、納屋、荷車引き等……は、僅かの所有者、分益小作農あるいは小作農と区別される。土地に対する従属は、地位の多様性により以上に結び付ける。生活と小作農の心性及び、地方自治体に居住するならば、彼の所有者の心性の間に、等しく搾取で、僅かの相違が、存在する。

大量の流出によって強い印象を与えられた、老いていく農業世界の中で、非有権者たちとサラリーマンたちという、外国人たちは、特に、トゥーロンの地域の中で、増加する。一九二〇年代の終り、恐慌は、支配するぶどう園で目立つ。協

同組合は、収穫の増大する役割を醸成するし、不況の結果を緩和する。唯、イエールの地域あるいはトゥーロンの西部の日雇い労働者たちと園芸労働者たちは、恒常的な繁栄をよく知っている。

ヴァール県の農民たちは、全国的及び国際的経済的情勢に依存する。市場の強制に服従させられた、ぶどう畑の拡張と園芸及び樹上栽培の普及で、農業は、政府の決議（関税率、補助金、多様な主導権）の中で、市場の規則を変更し得、政治的介入は、時局を追うように、彼らの経済的需要を考慮に入れ、政治に興味を抱くように、多数の農民を仕向ける。

国家に直面する労働者たち

労働者たちの大きなグループの中で、国家のサラリーマンたち（港湾労働者たち、トゥーロンの海軍工廠の労働者たち）と地位における労働者たち（鉄道あるいは路面電車会社の労働者たちとサラリーマンたち）は、離れる。工業部門は、冶金労働者たちの圧力内部のヴァール県における伝統的活動の後退で、膨張する。トゥーロンの海軍工廠の労働者たち、すなわち、彼らの特権のためうらやまれた勤労者たちの定員数は、政府の意図のままに変化する。トゥーロンの地域のこの労働力に、もつと不安定な状況下で、ラーセーイヌの造船所の労働力が、付け加わる。これらの二つの工業は、戦争の直後に、凡そ二万五、〇〇〇人の勤労者たちを数える。定員数は、一九三〇年代、後になって十分に減少する（一万人）。国家の発注への従属の下に、これらの部門は、政治での恒常的な関係によって、特徴づけられる。地方の政治的生活の中でその場にいる、労働組合の影響力に慣らされた、海軍工廠の勤労者たち、特にフランス人たちは、一九三〇年代の中葉まで、政治的に、もつと弱い協同組合的枠組み下にあった外国人たち、定員数の圧縮の場合に傷付き易いセーイヌの冶金労働者たちとは異なる。別の労働者の型は、古くからの工業村落（サレルヌあるいはサンーザシャリーでの陶芸）のなかで困難をコルク屋、帽子店などと分け合う。新しい産業部門は、村落で、労働者を固定する、すなわち鉄道、外国の強い影響力下のボーキサイト鉱山。地方の生活の諸条件を統一し、別の実践が混じったように見えるようにすることを政治が、可能にする。この状況は、その一貫性が、海軍工廠から地中海の鉄工場及び工事現場まで、単独な雇主から生じる都

市の地区の中で、再び見出される。

政治的生活への参加の減少

誰が参加しないのか

古くからの民主主義的伝統の地域、ヴァール県の中で、政治は、それぞれの日刊紙に所属する。多数のヴァール県人たちは、直接には政治的生活に参加しない。

トゥーロンの選挙名簿における登録者たちの間の多数の軍人たちは、休暇の時期に投票する。棄権の強い百分率は、そこから生じる。

男性のあるいは彼らの家族の、給料所得を有する外国人たち、何よりも先ず、イタリア人たち（一九二六年に一七%、一九二〇年代末の帰化圧力の後に後退）は、一九一四年前に、県の南東部の中で、優勢である。彼らは、ヴァール県の住民の低下を埋めて、見捨てられた職業を占め、耕作者たちに取って替わるあるいは工業の中で働いて、後に、最も北部の地方自治体を除けば、到る所に広がる。彼らは、帰化を要求する。古い外国人、イタリア人あるいはイタリア人の息子は、この住民の飛躍において本質的な貢献を構成する。県の南部の都市化された地帯に居住して、とりわけイタリアの北西部地方で生まれた（何よりも先ずピエモン）、農民及び工場労働者として、二〇年間フランスに滞在した家長は、職業の利害、ささやかな収入及び家族の状況を両立させることを望む。彼の社会的統合は、政治的同化に先行し、ヴァール県の有権者の再生に貢献する。

政治的決議の中で、合法的に、全ての比重を奪われた女性たちは、彼女たちの熱望を具体化する手段を保持しない。男性たちより少数の（一九〇一年の人口調査で一七万人の男性たちに対して一五万二、〇〇〇人）、彼女たちの進展のリズムは、上部であることを明らかにする（一九〇一年に一〇〇の指数は、一九三六年に、男性二一八と女性二三三に達する）。

南仏の社交性が、男性を優遇するのだから、諸政党及び別の諸組織の女性活動家たちは、稀である。いずれにせよ、宗教の実践の中で、相違は事実である。男性たちは、女性たちに、幾つかの宗教的に典札された義務を満たすよう心配を残して、もっと大きな隔たりを作用する。

青少年たちは、二一歳で投票権を得て、政治に近づく。ヴァール県の住民は、男性の強い比重で、地方の中で若くないように見える。全ての時期で、青少年たちは、政治的及び労働組合的生活に参加する。社会党の青少年たち及び共産党の青少年たちのグループでは、一九三〇年代を通じ、指導された余暇及び政治的教育の概念が、大きな地位を保持し、活動をよく知っている。責任ある部署の中での彼らの地位の向上は、一九三三年終りの分裂の後、新しい仏国社会党連盟の責任者になる、フランス社会主義青年同盟の書記の例外的ケースを除けば、他の場所よりもっと内気のままである。

政治的生活及び民衆的生活

流動性は、生活環境への古い帰属に応じて、政治的生活への参加の中で、不連続性を導入する。フランスの中で、フランス国籍の人たちは、相次ぐ人口調査の時期に、住居の県の中で、ますます少なく生まれる。ヴァール県の中で、このずれは、絶えず強化され、民衆の環境に、政治的無関心を発生させ得る要素をもっと根こそぎにされ得る。逆に、ヴァール県人たちは、県の外部に住む。歓待の地帯は、最も重要な点について、ブーシユードューロヌ県ととりわけアルプーマリテーム県という、国境に近いのである。たとえ、規則的復帰によって、ラリセエーヌで主要な住居を保存しながら、マルセイユ地域の中で働く、かかる冶金労働者たちで、マルセイユあるいはニースで働き彼らの村落の中で有権者に留まる、ヴァール県の南西部及び東南部の多数の村落の青少年たちであろうと、生まれた地方自治体に固執する。コルシカ地方は、後退あるいは別の理由への復帰、すなわち、歓待の土地を構成する。ブルターニュ地方は、復帰、船員たちあるいは海軍工廠の労働者たちの更迭として多数のヴァール県人たちを受け入れる。パリは、二重の性格でもっと個人的な定住、

最も裕福な家族の中での子供たちのための教育、もつと利益になる職を探し求める熟練労働者たちあるいは配置換えされた官公吏たちのための仕事を引き寄せる。諸植民地、とりわけ北部アフリカあるいはインドシナにおける海軍の工廠は、一時的滞在の場所を構成する。政治的生活への参加は、これらの変化に富んだ結果を受ける。

誕生の場所は、別の要素を付け加える。帰化した外国の生まれの人たち、何よりも先ずイタリア人たちは、不平等に、政治的生活の中に統合される。有権者たちの生誕の県を考慮に入れることは、地方的伝統及びそこから展開する、政治的行動の更新を測定する手段を提供する。トゥーロンを出身地とする者たちのグループは、役割を演じる。コルシカ地方で満ちあふれる民衆の地区は、総選挙のままに変化する政治的態度を採用する。西部で、強いコルシカ地方の影響力で、同じ民衆の選挙民は、右翼の市長エスカルトフイグあるいは共産党立候補者のため、投票で代り合つて、社会党の選択に並置する。この不安定さで、コルシカ地方にとって、地方的利害に依じて、投票は付け加わる。海軍で結び付けられた、ある地区の中で再結集された、多数のブルターニュ人たちは、均質でない行動を採用する。

選挙名簿の非登録は、ある民衆グループに作用する。確信に満ちた幾つかの無政府主義者たちのように、無意識的なあるいは自発的な、社会の周辺に生きる人々に加えて、県の労働者たちの小さな部分は、都市にもつとも頻繁な現象、すなわち、彼らの仕事及び住居の場所について決しない。われわれは、もし彼らが、何時もの住居を有する地方自治体の中で、登録されたままであるならば、稀に点検するよう、手段を持つている。

政治的参加のためなのか

政治的不安から遠去かり、これらの傾向で、これらの問題に対して、敏感化の中で進んで諸条件は、対立する。

民衆的環境に、職業的均質性は、衰退しつつある工業的活動で、小さな都市あるいは村落の中で、もつと頻繁な現象、すなわち、政治的生活への参加を強化する。その均質性は、協会の構造、サークルの維持の場合に、左翼あるいは右翼の

政治的武器を増加する。皮なめし工たちの間に、パールジョル⁽¹⁸⁾で、第一次世界大戦の直後に、国民ブロックの県の説明、ヴァール県の共和的ブロックを主張して、勢力は、広範に庶民の人間たちに食い込んで、クレマンソー⁽¹⁹⁾サークルを開始する。

初等教育は、青年問題の市民的意味を増加するのに貢献する。男性たちが多数である教諭たちは、彼らの実践の中及び村落の中での直接の介入によって、この利害を呼び起こすよう努力する。宗教から独立した同好会の創立あるいはサン・マクシイマンに近い村落、プールシユー⁽¹⁹⁾でのように、もつと伝統的に右翼で、青年問題の協同組合のサークルの地域、教員たちのカップルの仕事。これらの教員たちは、就学させた青少年たち、学校を離れた人々及び彼らの家族の政治的自覚を促進するため、この教育を開始する。町役場の書記たちという多数の教諭たちは、村落の中で、政治的生活の組織に貢献する。

ラジオ受信機の設置場所の所有は、生活のあるレヴェルの近代性の文化的及び政治的なもつと大きな開始の別の要素のように思われる。一九三〇年代の初めには、二%以下のヴァール県人たちがその所有者たちである。一九三九年のフランスにおいて、その数が、三、六によって掛けられたのに、宣言された設置場所の数は六、六によって掛けられた。住民たちにとって設置場所の比率は、感覚的に、フランスの残りに比べて、ヴァール県の中でもつとも弱いものに留まる。もつと急速な進展のリズムは、ハンディキャップを埋めることを目指す。思想の普及の新しい道具、すなわち、ラジオは、聴取が、共同であり得るのだから、もつと深く、民衆階層の中で、浸透する。

民衆階層及び政治的生活のデモ

ヴァール県の活動の、国家及び政治との直接の関係は、共和的約束と共に、ヴァール県人たちの古い関係を仕向ける。国家に対する政治的生活のこの相対的な従属は、政治的意味を抱くように、民衆階層に対して、追加の機会、すなわち、

地方的約束とともに活用される。

遺産

第一次世界大戦の前夜に、急進主義に加入し、のリックレマンソー（急進社会党、首相⁽²⁰⁾）主義を主張した後、共和的ヴァール県は、社会主義を選ぶ。社会主義は、都市の農村の利害、共和的遺産及び社会的組織の計画に対応する。社会党員になることは、単にフランス社会党連盟に加入することを意味しない。労働運動は、協同組合あるいは労働組合の組織の闘争に対して、政治的闘争を加える。これらの最後の組織は、外国人たちについてと同様にフランス人たちについて、別の結社の形態、部門別あるいは職業別のグループが、競争し、あるいは取って替わり得るトゥーロンの地域をマークする。労働の組合化の高い場所、すなわち海軍工廠の中で、国家と政治で優遇された関係を統合して、意識を構成する基本要素は、労働取引所の指導者たちの周りに再結集された、都市の別の勤労者たちと衝突する。この敵対は、トゥーロンの社会党員たちの間に、分裂を伴う。

戦争の試練

免稅通過の軍隊の影響力とトゥーロンから取り除かれたキャンプによって、ヴァール県は、戦争の年月の熱に浮かされたような活動をよく知っている。一九一四年八月からの一三部隊の事件は、南部フランスにおいて、神聖同盟の補足、すなわち、統一の役割を演じる。伝統的な工業の退廃は、労働力の出口を欠いて、促進させられる。南部地帯の中で、活動の飛躍は、続けられる。軍需発注は、初等教育によって広められた愛国的及び全国的価値に対応して、役割を演じるよう、これらの階層のため、最初の機会、すなわち労働者の定員数、女性たち及び青少年たちの増加を押し付ける。困難な生活は、一九一八年以来古い無政府主義者の活動家たちによって指導された、海軍工廠の労働組合によって、トゥーロンで、

間もなく導かれた、労働組合の要求の遅い再開を可能にする。神聖同盟に結集された、フランス社会党連盟は、最初の紛争の年月の間に、ゆつくりと生きる。トゥーロンの活動家たちは、神聖同盟で敵対的となり、党の少数派の態度を再び見出す。ヴァール県の世論において、民衆的階層の中で、一九一七年に、謝意で作られた大きな人気の特徴、すなわち、ヴァール県の上院議員、クレマンソー主宰の会議の初めに募る、打ち破るような欲望が優位を占める。

戦後の直接の緊張

戦闘の終りにより、政治的及び労働組合的活動は、また始まる。生活コストの上昇、軍需産業の定員数の圧縮、東側世界の中での革命的背景は、可能な闘争の場を提供する。一九一九年のメーデーが、それを証明するように、かつてよりもつと戦闘的に、労働組合は再生する。海軍工廠は、激しく動く労働組合的生活をよく知っている。同時に、ラッセエーイヌの地中海の鉄工場と工事現場及びフランス海軍の弾薬工場で、長いストは、一点に集中する。社会党員たちは、多様な選挙の期限を準備する。ロシアに対する武装した干渉に反対して、彼らは、特赦に、在郷軍人たちに、青年問題に及び当然第三インターナショナルについて、分かれる。国民議会議員及び県会議員選挙に失敗の後、彼らは、彼らの市町村における立場をよく保存する（広範な同盟のお陰で、ドラギニヤンの喪失、トゥーロン及びラッセエーイヌの利益）。クレマンソー主義のキャンペーンの中で、緊張を利用してクレマンソーとの別れを巡業によって先行された上院議員選挙において、古い社会党代議士フルマンは、別の古い社会党代議士ヴィニユを破って、議席を獲得する。

この時期の間に、労働運動は、都市の民衆的階層のために墮落した生活諸条件の理由で、発展する。一九二〇年二月に、県の責任部署に到着させられた少数派は、よく闘争の全国的主導権を抑える。地方のサンディカリストの指導者たちの逮捕の後、ゼネストは、一九二〇年五月六日に始まる。産業部門の国家への強い依存は、予断を容易にし、海軍工廠に、もつと有効な抑止を返す（二三の取消）。いずれにせよ、労働組合の定員数の低下及び一九二二年一月に明らかになる分裂の

方向への漸進は事実である。

困難な社会的背景の中で、社会党の組織の発展は、共和的勢力との同盟の問題について、討論を再開する。政治的（社会主義と左翼の勢力）及び社会的（労働者たち、民衆及び中産諸階層）同盟に有利な、ルノーデルの分析の衝撃は、後退する。全国的及び国際的進展に対決させられたヴァール県の中で、社会党員たちは選ぶはずである。フランスの状況と違って、革命的な流れは、少数派のままである。ルノーデルの友だちは、中道派で多数派を分け合う。トゥール大会の後、フランス社会党連盟は、県の中で多数派として、再生する。

左翼の政治的支配の方向

選挙の回復は、次の年月の中で、展開する。その特徴は、統一された熱望の中で、社会党の思想の影響力を表明する（県会議員の議席のため、イエール²³の小郡での、フランス社会党連盟の書記の活動に対する抗議、特赦に対する闘争の枠内で呈示された黒海の叛徒たちの勝利）。一九二四年の国民議会議員選挙での勝利は、この賛同を確認する。一定方向にさばかれたフランス社会党は、急進社会党員たちなしで、左翼ブロックあるいは左翼連合の戦術の地域的変形、すなわち、左翼の同盟の枠内で、勝利する。四人のフランス社会党の代議士は、一九二八年に勝ち、一九三二年に、五人の選挙当選者（四人のフランス社会党員）は、左翼のヴァール県を引き合いに出す。一九三〇年代の真中で、農業の危機は、国家の最も重要な点について、給料を受けられた住民の中で、デフレ政策の措置の結果として活用される。同じ時期、フランス社会党の中で、分裂は、その勢力を分け合う。一九三六年の国民議会議員選挙時に確認された、ヴァール県人たちへの左翼への約束は、選挙の際、共産主義に考慮を入れるはずである、すなわち、トゥーロンの都市が、右翼に再び渡すのに、二人の共産党代議士、二人のフランス社会党員。

社会党員たちにとって、急進社会党員たちとの関係の問題は、絶えず提起されるし、フルマンの再選と急進社会党員

ルヌー⁽²⁴⁾の再選を可能にし、上院議員選挙の時の秘められた同盟によって表現される。ルノーデルの分析は、これらの成功によって、自分が対決させられたように感じる。

この左翼及び社会主義のヴァール県は、何よりも先ず、民衆的階層に対応する。選挙のレヴェルについて、ヴァール県は、膨張させられた（ドラギニニャン）と同様に取り消された（ブリニヨール）有権者の中で、農業の中で、より堅固であることが明らかになる。ヴァール県は、あるぶどう園地帯の中及びトゥーロン東部の野菜及び果実栽培の地域の中で、相対的な弱点の地帯を呈示するが、トゥーロンの周辺で、広がり、再生する。混合した職の普及（農業及びボーキサイト鉱山での労働、生まれた共同体と接触して留まりながら、他の場所で働いて、鉄道労働者の中核となる労働者たちの出現）による、社会―職業の多様性の中で、農村の地方自治体において、社会党の選挙における影響力は、共産主義の利益に対して、悪化する。労働者の影響力は、左翼で投票を増大するし、都市地帯のため、公民精神を進歩させる（トゥーロンの西部地区）。労働者の影響力は、自動的でないやり方で、社会党の定着、次いで共産党の進行を優遇する。

民衆の環境と社会党の支配権の組織

われわれは支配権⁽²⁵⁾の概念によって、何を理解するのか。A II グラムシによって、与えられた一般的な意味を想起しよう。すなわち、新しい革命的道、支配権は、民衆的階層で同盟の組織網を作り上げた後、プロレタリアートが、指導する階級となっていた状況に対応した。われわれは、勤労者たちの全体を覆って、選挙によって点検された指導部、すなわち、改良民主主義的、社会的に豊かな共和制の建設のため、同盟、協定を含んで、定期的に、同意と正統性を確認して、広大な組織網の確立に由来し、単なる政治的指導部に対して、これらの分析を制限する。一定の社会的階層だけではなく、必要な同盟に根拠を置いて、政治的イデオロギー、政治的制度は、結局の所、支配した⁽²⁵⁾。社会的枠組みの支配権の制度は、全国的レヴェルについて、ブルムが、それを分析するように、権力の行使に欠くべからざる支えと同様に、拡大と模倣によつ

て、権力の獲得を考慮することを可能にして、県に移管された返事、すなわち、革命に取って代り、権力の獲得の過程への道を開く。

社会党の支配権の基礎

政治的路線の定義について、フランス社会党連盟、その活動家たち、その諸闘争は、基本的な軸を構成する。

党

社会党の定員数は、一九二一年と一九三三年の間に倍加する。地方主義の面から、反体制派は、サンシーザシャリーあるいはサレルヌのような地方自治体と関係する。時折、サークルは、支部と競争する。すなわち、サークルは、支持の点及び集会の場所で仕える。最も大きな支部であるトゥーロンの指導者たちは、国家より給料を受け、あるいは地位によって保護された職を占める。政治的路線の恒常的な対立は、その多数派が、ルノーデルの戦略に対立する、都市の活動家たちを分ける。増加する年齢で、地方自治体を出身地とする、別の社会党支部の書記たちの間で、農民たちが支配的となる。全国的レヴェルにおいて、ヴァール県連盟は、一九二〇年の終りから、そこに、委任の三分の二から四分の三以上までを集めるルノーデルの少数派の立場で、同一化する。一九二六年から、内部の相違は、社会党生活紙……の支配人の代議士の友人に対して、トゥーロンの社会党員たちの周りに、党の全国的多数派の支持者たちを対立させる。

選挙当選者たちは、大きな自主性を保存する。戦闘的エネルギーの最も重要な点は、多様な別の主導権に弱い場所を残して、選挙キャンペーンを集中する。一九二七—一九二八年に、トゥーロン地域において及び一九三一年—一九三三年に、県の南東部を除く連盟の新聞の欠如は、マルセイユの民主主義的日刊紙、小プロヴァンス地方人紙の従属の下に、社会党員たちを位置づける。青少年たちの組織は、民衆的環境における全体的基礎の重要な限界、すなわち、婦人たちの組織が、トゥーロン地域を覆うのに、あらゆる県の中で、一九二〇年代の終りに始まる。外国人たち、及びイタリア人たちは、反

ファシズムの主導権に対して、党の援助をもたらしながら、独立的活動を遂行して、イタリア社会党の支部及び活動家たちを介して関係する。

ルノーデルは、二〇年の間に、これらの社会黨員たちについて、イデオロギー的及び政治的後援を行使する。彼の路線は、社会経済的構造の変更なしで、政治権力の獲得について、中産階層と一緒に、民主主義的熱望及び同盟を統合する。ヴァール県の社会黨員たちは、全国的レヴェルにおいて、党が、条件的な内閣への参加、連盟及び議会グループの自主性を要求する時、あるいは党が、国防に結集する時、フランス社会党の少数派の指導者に対して、彼らの支持を与える。トゥーロンのグループの周りに、全国的分析と一致して、連盟の少数派（委任の最大限で三分の一）は、発展する。一九三三年から、二つの社会党は、共存する。総選挙が、義務を課する、仏国社会党は、古い急進主義の周辺に、再編成の中で融合する。少数派、非常に早いフランス社会党は、困難な情勢の恩恵に浴して、勢力を獲得するし、週刊紙、ヴァール県の民衆紙を創設しながら、ヴァール県の住民たちと密接に結び付いて行く。党は、伝統的政党、青少年たち及び婦人たちによって見捨てられた勢力の方に広く、最後には、社会党の会によって、社会主義によって、党の仕事の場所について、長い間無視された労働者世界の中で浸透しながら、トゥーロンの海軍工廠のサンディカリズムの中で、労働総同盟の年長者たちの相対的な抹消の埋め合わせをする。少なくとも、県の都市の中で、民衆階層にもっと近い党にする。再編成。農村社会の中で、ルノーデルの理想に対して、古くから同意する多数のその他の人々と同様である。一九三六年の国民議会議員選挙の時、暴露された共産党の急激な進歩によって必要になったこれらの更新は、代議士市長、エスカルトフィグの民衆主義^{ポピュリズム}に対して、支持することによって試みられた。トゥーロンの世界を除外して、その全体の中でヴァール県の庶民の左翼への動向を確認する。

左翼の組織

政治的普及は、支持する組織の代わりになり、自覚の機構の中で介入して、別の社交性の形態の中でなされる。一九一四年前に一般的な構造、すなわち、サークルは、存続し、変化する。この緊張緩和の理由は、左翼の勢力の進んだ地帯（カラー⁽²⁶⁾スの小郡）の中で同様に、もつと保守的な地帯（サンマーグシイマンの地域）の中で、社会主義のために、政治的闘争の中で、約束される。都市において、稀な例外として、もつと束の間のサークルは、直接に、もつと政治的且つ民衆的外見を取る（単なる支持から社会主義まで、違ったことを望んで、永続的な活動を維持するVレブレモンによって創られたサークルの場合で、全てのニューアンスのトゥーロンのサークル）。人権同盟のグループは、開かれたままであるし、反ファシズムの動員の中で、あるいは統一された熱望の水結の時期の中で、重要な役割を演じる。グループの主導権は、別の左翼の流れの中で、接触の機会を創り出す。社会黨員たちの分裂は、彼らの生活を混乱させる。フリーメーソン及び自由思想派は、反聖職者主義及び宗教から独立した闘争について創設された社会主義運動に対して、もつと個人的な、もつと知的な取り組み方をもたらす。民衆界と知的な小ブルジョワジーの間に、連絡の基本要素、すなわち、明白にコミットしなかった、これらの連帯は、政治闘争の結果として生じ、独立をもつと困難にして、単純な活動家たちの上に、深い関係を強化する。これらのグループの行動は、ヴァール県の社会黨員の活動家たちによって、一定方向にさばかれたし、活用されたというように感じる。この恒常的相互浸透は、社会黨員たちの分裂の時、強調された現象、すなわち、決定機関の全ての序列化に対立する。

地方的政治、ヴァール県の庶民についての恒常的な大きな争点

県の活動の場から・・・

県会及び郡会を支配して、社会黨員たちは、ヴァール県の運命の大きな責任者のように思われる。選挙の闘争によって

獲得された、この同一化は、制限された、測り得る及び尊重された、特別の任務のために民衆諸階層の信頼を獲得したし、政治家の型を生じさせた。過度に代表された農村の選挙民は、支配のために決定的として、社会黨員によって考察される。いずれにせよ、自由職業のメンバー及び官公吏に結び付けられた、農村によって支配された県議会の事実である。そのように、民衆諸階層は、県の政治の決定者たちの間には、再び見出されない。一九二〇年代の中葉から、フルマン上院議員と、とりわけ、単なる会議の労働者、ラマルク⁽²⁷⁾によって導かれた、社会黨員の左翼が、殆ど支配権の影響力を行使する。一九三四年まで、不規則なやり方で、責任の分配は、職務を占めることを、少数派に可能にする。後に、政治的急進化は、共産黨員に幾つかの譲歩として、鍵^{II}部署のため、復帰を押し付ける。決定的な行為、すなわち、予算の周到な作成は、キャンペーンの近代化を不利とせず、機関の改善の融資のための、一九三〇年代の中葉に増加する負債及び漸進的な増加によって、特徴づけられる。社会黨員たちは、完全に、社会的あるいは教育の領域を引き受ける。逆に、高価な投資にもかかわらず、プロヴァンスの鉄道の開発が悪化するのに、社会黨員たちは、大きな経済的選択について、フランス社会党の多数派は、党の政策において、信頼している接触の最も可能なことを守るよう絶えず心を配る。人民戦線の時期は、初めて、政府の政策と議会の多数派の政策編成の意図との間に、適合が表現される。県議会の中で、広い多数派を保存するような事實は、社会主義、ヴァール県人たち及び一般的利害の間に、模範的な同一化にとって必要な条件、すなわち、独創的、建設的、管理的、責任ある道の中で、社会主義に向ける。県議会員選挙は、社会黨員たちと住民の間に、創設された信頼の関係の中で、決定的な場所を占める。

.....市町村の活動の場

市町村の管理は、社会黨員たちが、ヴァール県の社会に、特に民衆諸階層に同化し得るため、交代を構成する。市の役人たちは、彼らの継続によって、レットテルの問題が、解決されることなしに社会党の思想の浸透を保証する。多くの分裂

は、地方的なものに留まる、しかし、連帯は、そこに、少しも気取って思わない。戦争の直後に、多数派、すなわち、選挙当選者たちの間において、急進社会党の中核は、社会党の進行による市町村闘争が、存在しなかったかのように、衰退する。一九二五年から、左翼の市の役人たちは、市長たちは、少数派であるのに、半分以上を代表する。都市は、当時、社会主義のために、重きをなす。四年後に、トゥーロンの市当局の喪失にもかかわらず、社会党の左翼は、多数派になる。そこから、一九三三年の分裂の時、大多数の選挙当選者たちを生む、新しい社会党の選挙の比重がある。もっと大きな青年同盟は、左翼の選挙当選者たちを区別するし、フランス社会党は、強化された若さの源をよく知っている。職業的に、もっと伝統的な、社会主義のヴァール県は、耕作者たちに対して、大きな場所を与えるし、サラリーマンたちの間に、国家経営者の役割は増大する。市の役人たちの全体の歪曲は、フランス社会党員と共産党員たちが、地方的立場を分け合う、一九四〇年代の終りの状況を準備する。農村のヴァール県の中で、社会党の市町村の影響力は、政治的過去に従って、別の選挙の時、現れた動向で、第一次世界大戦の直後に、市の役員たちの個人的影響力に従って変化する。市町村の異議は、社会党員たちにとって、もし彼らが、組織されるならば、市町村の生活に影響を及ぼすような可能性を開く。

両大戦間の左翼及び社会主義のヴァール県は、均質のように思われない。この支配は、各地方自治体の社会的及び歴史的现实の紆余曲折を共有する。社会主義は、社会主義化された領域に投資しながら、その立場を強化する。日刊紙を管理することは、必然的に、よりよく社会主義を打ち立てるように仕向ける。社会党の多数派で、この左翼の県は、民衆階層、選挙民の全体の中で、彼らの大きな利害の対立、すなわち、内陸のヴァール県、沿岸のヴァール県、農業、観光を保持する。多様な提案に影響され易い、社会党の選択は、全体の政策を管轄しない。選挙当選者の極めて重要な地位と委任によって押し付けられた関係は、一九三三年の分裂が重大化する、フランス社会党のこの支配のために、不安定さから自由になる。

民衆階層と政策の間に、左翼の勢力の、特に支配権を通しての社会主義の定着の機構の分析の中で、探索された多様

な道は、われわれに、いわゆるイデオロギー的現象を、運動の政治的デモの全体と混同しないように考えるよう仕向ける。他の場所よりもっと、民衆的環境に制限された合意による関係は、社交性の形態、あるいは市町村、及び県の決定機関が、問題であるように、自由になる。重要人物たち、男性たち、活動家たちは、恵まれた地位を占める。最後の分析において、思想の代表団が、規則となるにもかかわらず、活動家たち、及びもっと広く、グループ、協会の中で混同した、多数の個性を決定する。これらの最後のグループの働きは、もしわれわれが、民衆的環境に、政治的影響力を理解することを望むならば、研究の対象になるはずである。総選挙の中で表現される政治的自覚のこれらのデモを理解することは、年表の減少による、減らされた参照の場所の知識を押し付ける。われわれは、同時に、全体の現象と特殊な状況を検討しながら、庶民の中の政治的機構を報告し得る。かかる意図は、回り道と注意を必要とする働き掛けを押し付ける。

ヴァール県は、民衆的環境において、成功した社会党の政治的定着の完全な性格を呈示するのか。色々な基本要素の間の強い相関関係の欠如は、われわれに、明白な均質性の下に、庶民と政策の間に、違った性質の関係が隠れていることを、考察するように準備した。われわれは、そこに、地域の環境の中で、政治的あるいは個性的性質の促進を活用して、十二分に、国家の影響力に依存して、空間の一時の変形（生産、活動、情勢上の困難）を強調しながら、歴史的、社会・職業的あるいはイデオロギー的性質の主要な型を固定した。民衆諸階層の中で、政策の進捗を理解することは、突然起こった外観を歴史的知識に作り上げる企てに帰着する。これらの方法的賭けは、ある行き詰まり状態に仕向けるように危険を冒し、モデル化する働き掛けから相続された慣習と衝突する。選択の問題、利害の問題……⁽²⁸⁾

五

この著作（『左翼のヴァール県』）は第二共和制の宣言から一四二年目の記念日の日、かかる主題のための象徴的な日付、

すなわち、一九九〇年二月二四日、公開口述審査を受け、JIIジローの国家博士論文のテキストの政治的部分を構成する。普通選挙の創設によってマークされた、このフランス史の転換点は、後に、永続する共和的理想の確認によって、多数の地域の中で、表現される。ヴァール県について、この共和制は道を開き、一八五一年二月二日のクーデタが、希望を終らせた時、農民たちは、彼らの手に銃を取る。左翼は、クレマンソーを支援しながら、これらの一九〇七年のぶどう栽培者たちのように、彼らの生産を防衛しながら、左翼のヴァール県紙という週刊紙によって支えられた名簿で、一九二四年の国民議会議員選挙に対して、右翼を一掃しながら、現れる。労働運動が発展する時、社会党員たち、次いで共産党員たちは、この旗を取り戻す。彼らが、同じ意味の中で、人民戦線の下で、次いで抵抗^{レジスタンス}の中で、引つ張る時、これらの左翼の活動家たちは、第一のレヴェルで、再び見出す。この研究の中で、一九二〇—一九三〇年代の左翼のヴァール県が、問題である。

全ての研究は、歴史を持つている。そこに、大きな転換を位置づける必要がある。その理由は、歴史家の研究は、一本調子であり得ない。研究は、新しい原資料の発見の結果、すなわち、研究に応じて、現れる。同時に、新しい問題の結果、すなわち、新展開をよく知っている。歴史家は、十分に、ゆっくりと働く。この著作に関するものについて、二七年間は、今日の出版と最初の研究を区別する。

・大きな研究の段階

研究は、JIIドローズの指導の下に、「ヴァール県の中の人民戦線」という題名の下に、一九六八年十一月に提出された、第三課程学位論文の枠内で始まった。平行して、JIIジローは、PIIヴィラールの指導の下に、一九二〇—一九三九年フランスの社会的構造及び共産主義の定着（党、選挙民）を対象として、国家博士論文のための別の研究に着手した。全ては、よく進んだ。

問題提起は、同一であった。社会の全体及び特に社会運動での生活の中で、政治的生活を研究するのが、問題となった。すなわちここに、県の枠は、取り組み方を制限した。動機は、当然必要であった。共産党員たち及び社会党員たちが一緒に勝ち取った、この労働者統一の強い時期を理解することを望んだ。

そこで、共産主義史のための利害は、フランス社会の中で、彼の挿入の道、すなわち、新しい研究の道を約束することを可能にした。

二つのケースの中で、原資料は、極めて豊富であった。すなわち、

ヴァール県の中で、県古文書の支配人、J-Jルトレは、現代史に直面して、古文書の塞がりに強く疑いの余地があることを見出した。彼は、M（一般行政）シリーズの古文書を分離したばかりであったし、その豊かさをよく知っていた。彼は、J-Jジローに、全体の相談をした。別の原資料、とくに新聞、及びこの動きを作った活動家たち及び諸組織の励ましが付け加わった。

フランスの研究のため、参考資料は、手ごろになったし、両大戦間の古文書を調べることとも可能となった。これらの原資料は、コミンテルンフランス支部の古文書のマイクロフィルムの形で、豊かにされた。

一九七〇年代の初めに、第三課程論文が、実際には、完成させられたのに、J-Jジローは、幾つかの理由のため、職業につく迄著作を延期するように決めた。すなわち、倫理上の理由から、暗黙の道徳的な約束は、県古文書の支配人たちに、J-Jジローを、結び付けた。彼らは、禁じられた古文書を彼に渡しながら、彼に、広く役立った。彼は、余りにも早く、獲得された結果を引き出しながらも、彼らの信頼を裏切り得なかった。

科学的要求から、J-Jジローが、一九三〇年代の初めから、その問題を作ったように、研究することは、ヴァール県の民主主義キャンペーンの深遠な性質、その地方的変形を、彼に、理解することを可能にしなかった。一九三六年の成功の理由をつかむためには、世紀の初めから、成功の進展と同化することが必要となった。結局、一九三〇年代の中葉から、ヴァー

ル県の中での共産主義の急速な出現は、県の深遠な政治的構造及び左翼のヴァール県の、あらゆる構成分子の知識から、説明し得た。すなわち、個人の好奇心から、JIIジローは、ラIIセエーイヌで、彼の養成の時期において、この都市の共産党の市当局の中で、深遠な憎しみの諸事実が、左翼の勢力の間に、独特な関係を作っていることに出会った。県の現実には、解読する必要がある、謎を含んだ状況が豊かなように思えた。

最後に、活動家たちの説明書の編集と平行しての研究は、JIIジローの当惑を増加する。フランス労働運動の伝記辞典のため、決定された狭い基準に答えて、活動家たちを採り上げるとは、小さな責任を占めたし、あるいは別の組織（例えば、サークル、協同組合）に所属した活動家たちの約束及び役割の急激な増加を報告するのを妨げた。

JIIジローは、ヴァール県について、主要な研究の対象を作るよう、事務所の中で、約五、〇〇〇人の活動家たちの生活あるいは左翼のヴァール県を構成する組織の生活に入り込むよう決定した。

逆説、更には混乱がある。すなわち、JIIジローは、出来る限り最も完全に、一九三四年と一九三九年の間の、共産主義、サンディカリズム、協力、教諭たち、県の生活をよく知っているし、彼は、一九三三年の分裂まで、社会主義について彼の研究を集中させるため、殆どそれについて何も言わなかった。つまり、もし情勢が、社会主義を可能にするならば、別の出版が、これらの陰の地帯を露わにした。

・題名の言い回しが、意味することを望むもの

ヴァール県人たちは、まず、ヴァール県のあらゆる地方自治体の住民の全体を、何よりも先ず、庶民、民衆諸階層を構成し、強調は、自己同一性アイデンティティの概念について置かれる。すなわち、自分がヴァール県の住民だと感じるヴァール県人たち、二つの社会的グループ、軍人たち、彼らがフランス人になる時を除けば、外国人たちを括弧に入れること、何よりも先ず、ヴァール県人たちは存在する。JIIジローは、僅かな足跡を残す、民衆諸階層の政治的生活を知ることが望んだ。

社会主義は、諸イデオロギー、人間たち、諸運動（そして何よりも先ずフランス社会党）の研究を再編成すると同時に、左翼の表現で、ヴァール県のために混同される。しかし、共産主義、無政府主義を拒絶する意識及び心性の広い現象に持続させられた注意は、付け加わる。いうまでもなく、取り組み方の極端な多様性、イデオロギーの定義、諸党の、運動の、日常実践の、出来る限りの干渉の領域、地方自治体及び県に制限された、政治屋の職務の管理の分析が、事実である。

全ての題名の中で、最も短い言葉は、時折本質的になる。調整の結合は、習慣的に、言説の二つの部分を結び付けるように仕える。ヴァール県人たちの、次いで社会主義の待遇は、引き離されない。ここに、接近は、表現する違った性質の二つの部分の付加ではない。Jルジローは、恒常的対決の、相互性の、及び同時に出来る限りの中断の考えを導入するよう理解する。

何故、一九二〇—一九三五年は、限界のように思われるのか。Jルジローの知識及び彼の質問は、二〇世紀の初め及び一九五〇年代まで、広くあふれる。これらの制限は、別の歴史家たち、Yリノードあるいは一九一四年の前、Jマス、一九三九年の後、J Mギヨンで、立派な友情によって、説明される。取り組み方の統一の不安は、基本的に現れる。彼の研究は、社会党の二重の失敗（一九一九年の国民議会議員選挙、県会の議長の喪失）から始まり、別の敗北の不確かな結果によって、ヴァール県の社会の中で、社会主義の政治的及び文化的支配権を再確定し、強固にした一九三三年終りの分裂を以って終る。

・左翼のヴァール県のための一般的枠

ヴァール県は、遅い変更をよく知っている。外国の影響力及びフランスの別の地域に生じた移住の貢献の結果、人口の進行は、積極的に都市及び南仏地帯を利用する。本質的な農業の活動、ぶどう栽培は、市場及びその規則を変更し得る政治的介入に依存する農民たちを表す。トゥーロン地域の中に集中する主要な産業は、国家の発注に従うままである。政策

に対する恒常的な関係は、県の日常的生活を特徴づける。分裂及び全員一致の要素は、ずっと前から、それと共存する。分裂の要素は、左翼のヴァール県で同化して、社会主義によって、支配権の中に集中する。

これが、著作の中で、しかし、J・J・ジローの博士論文の中には載っていない証明を要約したものである。博士論文は、四つの局面に再区分される。すなわち、ヴァール県の庶民の構成分子の知識、社会的構造、政治的諸事実及びそれらの関係の検証、社会黨員たちの支配の諸手段、社会黨員たちと地方的環境の間の主要な諸関係、一九三六年の国民議会議員選挙は、共産黨員たちでの利益の未完な分配で、左翼の選挙の開花の中で、定着の規模を評価することを可能にする。

J・J・ジローは、彼の博士論文の原稿を、約半分に減らした。全体を圧縮し、要約を復元するよりはむしろ、社会的構成分子の関係の中で、政治的部分を保存するため、証明の社会的局面を廃止することとした。

・共和的及び社会主義のヴァール県の中の第一次世界大戦後における政治的生活の再開

紛争が終つて、政治的及び労働組合的生活は、再開する。労働組合的構造は、戦闘的な態度の回復で、ヴァール県の中のあらゆる所で再生する。社会黨員たちは、彼らの組織を再編成する。

これらの選挙は、労働運動が、生活諸条件の漸進的变化を理由として、発展する。少数派のサンディカリストたち、スト参加者の攻撃は、ヴァール県にも到着し、討論は、第三インターナショナルについて、議論の中心に、繰り返される。

社会黨員たちに対して、選挙の不測の事態は、革命的道の方へ、フランス社会党の多数派の進展と真正面に、衝突する。第一のレヴェルで、共和的諸勢力とともに、同盟の問題を想起させる。別の問題も現れる。ロシア革命と特赦。第三インターナショナルへの加盟の流れは、雑多な要素から成るままである。

一九一九年に、勝利を得た、国民ブロックに対して、徴候は、社会党の影響を表明する。急進社会黨員たちと共産黨員たちは、政治的孤立をより好む。このフランス社会党の選挙における優位は、市当局が、フランス社会党によって、

行政が行われるのに、同盟が、左翼のブレモン²⁹を保護するトゥーロンを除けば、確認される。一九三三年の新社会党の分裂に当っては、選挙当選者たちの大部分が仏国社会党に従う。社会党の有権者たちの分散は、トゥーロンの都市が、右翼で想起するのに、二つのフランス社会党員たちの側に、共産党に、未来の人民戦線の代議士たちの立場で、二人の立候補を置くことを可能にする。この進展は、農業の生産及び国家の最も重要な点について、デフレ政策の措置によって、賃金を支払われた住民に強く印象を与える、危機から生じる。（省略）。

・ヴァール県の社会主義の基礎

社交性の型は、支持する組織によって代わるし、自覚の機構の中で干渉する。

ヴァール県の中で、社会主義は、県の事件の管理の中で、現実干渉する。

政治的分裂は、動向の討論の中で、消えない。

市町村会議員選挙は、社会党員たちが、ヴァール県の社会で一体化し得るため、本質的な交代を構成する。唯一トゥーロンは、十分に、右翼で定着する。（省略）。

・地方的枠の中での社会党員たちについての幾つかの視線

都市の社会主義の共通の性格、すなわち、多数派の選択は、一九三三年に、フランス社会党で留まるよう作用する。トゥーロンでの、右翼の勢力及び軍事的影響力は、社会党員たちの立場に影響を与え、労働者の歪曲を仕向ける。政治的制限は、不明確なままであるし、混乱は増加する。

すなわち、出身地のグループ、共産党員たちの中核、指導者、エスカルトフーグあるいはVリブレモンの間の特殊な関係、及び住民。結局、社会党員の支配権が、県の中で、最大に達するのには、社会党員たちとトゥーロン人たちの間に、膨

張させられた関係が生じ、敗北、すなわち、市の喪失によって、表現される。労働者の都市、ラッセエーイヌで、市の下部組織で、その伝統的同盟を続け得るようにしなければ、横柄な社会主義は、一九三〇年代から、明らかにされた共産主義を数えるはずである。ドラギニニャンで、逆に、中産階層の比重は、社会黨員たちに対して、自然な同盟の実践を押し付ける。反体制派の中で、ルノーデルに従わないような選択は、逆説的のように見え得る。

主要な活動のための村落の中での実践は異なる。例えば、もし環境が、カルシエースでのように、右翼に傾くならば、社会主義が、そのチャンスを見付けるためには、地方的経済恐慌で足りる。共産黨員たちとの、社会―政治的衝突は、地方的政策の深遠な危機を生じる市の管理の中で、激化する。

構造は、制限された合意による関係を作り出すように思われる。われわれは、歴史的、社会職業的あるいはイデオロギ―的性質の主要な型を、それによって固定した。(省略⁽⁹⁾)。

—一九九六・一〇・八一—

- (1) Cf. J. Girault, *Sur l'implantation du Parti communiste français dans l'entre-deux-guerres*, Editions Sociales, 1977. 抄訳として、拙稿「フランス人民戦線研究の新動向」『法学論集』一五―、一九六九年、一九―四三頁、参照。
- (2) Cf. J. Girault, *Benoît Frachon communiste et syndicaliste*, Presse de la Fondation nationale des sciences politiques, 1989. 読後で、B=フランシオンは、微細に、描かれている。ただし、本文の批判的論点は、皆無である。
- (3) J. Girault, *Le Var rouge. Les Varois et le socialisme de la fin de la première guerre mondiale au milieu des années 1930* (Ecrit avec briveté : *Le Var rouge*), Publications de la Sorbonne, 1995 : 2.
- (4) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, pp.11, 13, 19, 37, 60, 63, 65, 134, 147, 311, 640, et cetera.
- (5) *Ib.*, pp. 263, 301, 344, 417, 691 et cetera.
- (6) *Ib.*, p. 9.
- (9) *Ib.*, p. 10.

- (7) 『定着』とくまの菱形（＝シンロー）。Cf. S. Courtois & M. Lazar, *Histoire communiste française*, PUF, 1995, p.15.
- (8) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, *Ib.*, p. 34 et cetera.
- (9) Cf. *Ib.*, pp. 58, 330, 721 et cetera.
- (10) Cf. *Ib.*, p. 18 et cetera.
- (11) Cf. *Ib.*, p. 58 et cetera.
- (12) Cf. *Ib.*, p. 220 et cetera.
- (13) Cf. *Ib.*, p. 42 et cetera.
- (14) Cf. *Ib.*, p. 32 et cetera.
- (15) Cf. *Ib.*, p. 101 et cetera.
- (16) Cf. *Ib.*, p. 19 et cetera.
- (17) Cf. J. Girault, *Les Varois et le socialisme 1920—1935*, in *Cahiers d'histoire de l'Institut de recherches marxistes (CHIRM)*, Sommaire no 43, 1990, pp. 146—152.
- (18) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, *Ib.*, p. 31 et cetera.
- (19) Cf. *Ib.*, p. 280 et cetera.
- (20) Cf. *Ib.*, p. 56 et cetera. Cf. *Dictionnaire historique de la vie politique française au XXe siècle*, sous la direction de J. —F. Sirinelli, PUF, 1995, pp. 183—185.
- (21) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, *Ib.*, p. 58 et cetera.
- (22) *Ib.*
- (23) Cf. *Ib.*, p. 23 et cetera.
- (24) Cf. *Ib.*, p. 108 et cetera.
- (25) 後房雄『グラムシと現代日本政治』世界書院、一九七〇年、デイヴィド・フォオガチ編、東京グラムシ研究会監修・訳『グラムシ・リーダー』御茶の水書房、一九九五年、片桐薫『グラムシと二十世紀の思想家たち』同、一九九六年、等参照。J＝ジローの本
文には、A＝グラシムへの言及がない。支配権（ヘゲモニー）等の概念は、本文の随所に、有効に使用されている。
- (26) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, *ib.*, p. 22 et cetera.

- (27) Cf. *Ib.*, p. 70 et cetera.
- (28) Cf. J. Girault, *Couches populaires et socialisme dans le département du Var entre deux guerres*, in *CHIRM*, sommaire no 50, 1992—1993, pp. 117—131, J. Girault, *Cercles, socialisme et Var rouge entre deux guerres*, in *Cultures et Folklores républicains*, 1995, pp. 83—95.
- (29) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, *Ib.*, p. 175 et cetera.
- (30) Cf. J. Girault, *Le Var rouge*, in *Recherches régionales Alpes-Maritimes et contrées limitrophes*, no 2, 1995, pp. 119—127, J. Girault, *Ouvriers, socialisme et communisme en France (XIXeXXe siècles)*, in *Historiens & Géographes*, no 350, 1995, pp. 335-348.